



1965（昭和40）年頃の賑わいを見せる燕駅前模型。当時は市内に約1200もの工場があり、「燕通り」と呼ばれる通勤の乗客で混雑していた様子がよくわかる。朝夕のラッシュは都会並みだった。



燕の「ものづくり」の歴史を感じることができる燕市産業史料館（新潟県燕市大曲4330-1 TEL 0256-63-7666）。金属洋食器や世界のスプーンなど、歴史的にも貴重な品々が展示されている。



金属洋食器生産の創生期、燕の伝統工芸のひとつでもある「鋳起（ついき）銅器」の工房でスプーンを作っている様子。工房は間仕切りのない一室使用で、当時のイメージを極力再現したもの。



当時の銅器職人の作業場を再現した様子も垣間見ることができる。使い古され細くなった小さな金槌、独特の風合いを醸し出したメガネ鞆（たんず）など、作業場の空気が生々しく伝わってくる。



室町時代頃に鍋の料理をすくい、椀に取り分けるのに使われていたとされる木製の杓子（上写真左）。7世紀後半～10世紀頃、身分の高い人が毒物から身を守るために用いていたという佐波理匙（さはりさじ・上写真右）。



鋳起銅器の製造作業。1個の銅の固まりを打ち延ばしながら焼きなましを繰り返し、継ぎ目のない器を仕上げている鍛金技術のひとつ。



和釘の生産で成長を遂げていた燕、その後洋釘の登場により大打撃を受け、江戸時代後期には「煙管（きせる）やヤスリ、矢立などの加業へと転換していった。写真は当時の煙管をもの見事に描いている風刺画。



# 不死鳥の如く蘇った燕

金属洋食器の生産地として金属加工工業という世界的にも認められる地場産業を確立した燕の街。先人たちの心と技術を忘れないために、時代の波に採まれながらも今を生きる職人たちが奮闘する現場。それぞれの道で闘う男たちの思いは、バイカーたちにも届くのだろうか!?

写真提供：燕市産業史料館

## すべては和釘から始まった金属加工工業

越後平野をゆったりと流れる信濃川。どこまでも広がる田園風景に包まれた新潟県は燕市。この地域は金属洋食器に代表される金属加工産業で知られていることは周知の事実である。この地場産業が根付いた起源を紐解いていくと、江戸時代初期に和釘作りが始まったことに端を発する。江戸の大地震などにより釘の需要は急増し、燕は和釘の一大生産地として成長していった。しかし、大量生産の洋釘の登場で生産量は激減。煙管など別の金属加工工業へ転換することを余儀なくされた。新たな金属加工工業を模索していた江戸時代後期、仙台の渡り職人が鋳起銅器の技術を伝えたことから燕の銅器業が始まったとされている。弥彦山からの優良な銅で鍋、ヤカンなどの日常銅器を製造。一時は数百人もの銅器職人がいたが、安くて軽量のアルミ製品の出現で燕の地場産業である鋳起銅器業は衰退の道をたどることになった。

た。だがこの銅器業を発展の基盤として、大正時代には銅器から洋食器の産地へと発展を遂げていった。昭和に入り、数々の不況の煽りを受けながらも地元の中堅企業はそれぞれに職人を養成した。鋳起銅器の産地として確立していた時代から、世界的な洋食器の産地として発展してきた現在。新しい技術の革新と共に、伝統的な技術も大切に継承されている。職人魂で幾度となく繰り返されてきた苦難を乗り越え、頑なに金属加工産地としての地場産業を継いできた燕。いつしか「踏んでも芽を出す燕」と表現されるようになっていった。農家の副業として始められた和釘作りから、世界的に認められる金属洋食器の生産地へと変貌を遂げた燕。江戸時代の匠たちの技は、確実に今を生きる職人たちに脈々と受け継がれている。日本一の金属洋食器、日本一の米どころ……今の燕を支える職人たちの情熱、そして志がここにある。

